



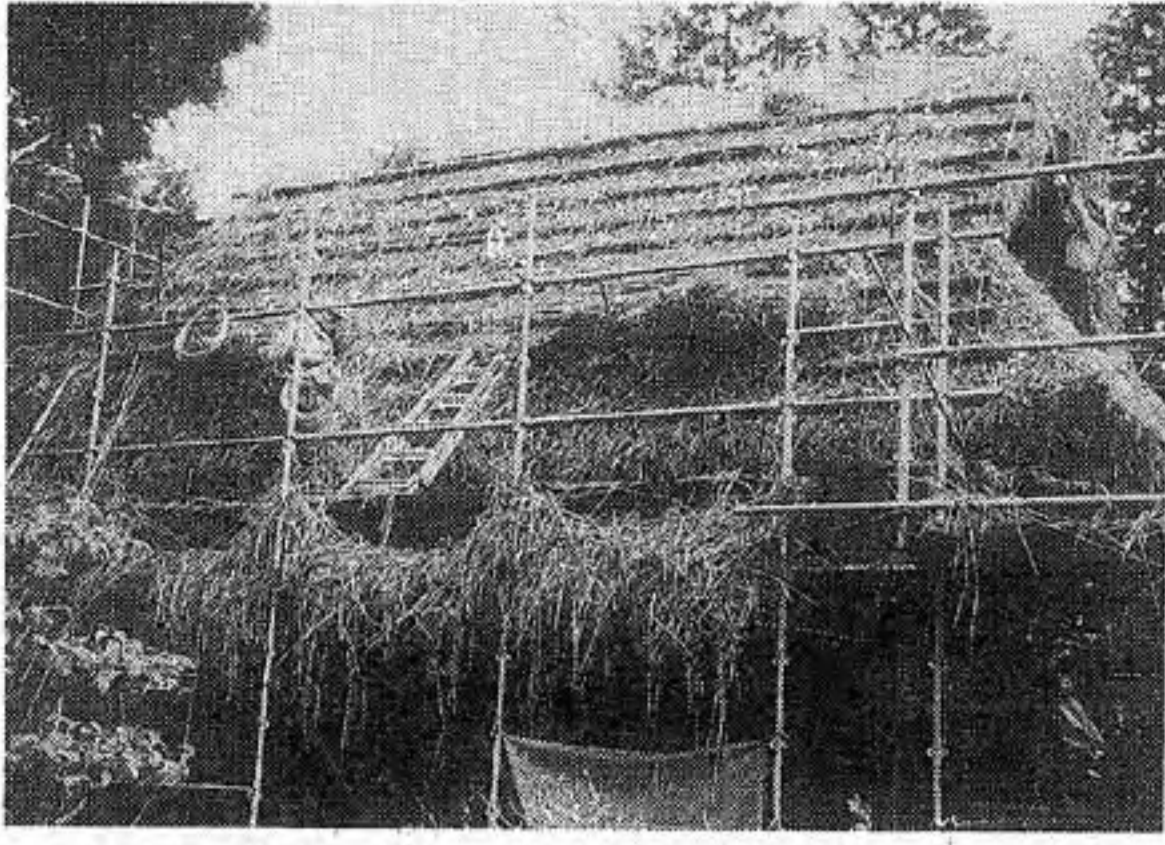
茅(かや)ぶきの山寺と
き替え作業が進められてい
しても知られる七百石町の
真言宗石王寺(しゃくおう
じ)(松井貞
海住職)。い
ずれも茅ぶき

七百石町の石王寺

の本堂と仁王門は府の有形
文化財に登録され、その景
観は背景にある山並みとも
見事にマッチして訪れる人
の心を和ませる。仁王門で
は、十四年ぶりに茅のふ

心和む「茅ぶきの山寺」

14年ぶり仁王門の屋根ふき替え



ふき替え中の仁王門。4人の職人たちが連日、寺に泊まり込みで作業に当たっていた(写真はいずれも七百石町で)

に日本三筆にあげられる嵯峨天皇は、故事によると同寺近辺の山から産出する石で作られた硯(すずり)を愛用していた。そこで「石の王子となるべし」との勅が伝えられ、石王子石と名付けられたという。その石王子石の出る台地に寺を建てた空也上人は、石王子にちなんで岩王寺と名付けたとされる。しかし現在、石王子石を掘ることはできない。



本堂の茅ぶき屋根も傷みが激しく、改修の必要がありそうだ

最盛期には寺僧百人、寺領七百石があり、参拝者が絶えなかったという。寺領「七百石」は今でも町名として有名。空也上人が平安時代中期の天曆三年(九四九)、第六十二代村上天皇の御世に創建したと伝えられている。寺名の由来は、それより約百年前の嵯峨天皇の時代(八一〇)八二二)にまでさかのぼる。弘法大師、橋逸勢とも現在の本堂、仁王門、鎮守堂、庫裏が建ったのはほぼ同時期と考えられており、江戸時代中期の延享二年(一七四五)ごろ。それ以前から秀吉の時代までの寺の様子は定かでない。寺の存在は確かだろうが、荒れ果てていたのが再興されたのか、今の建物より大きな物が建っていたが持て余して縮小されたのか、よく分かっていない。

として有名。空也上人が平安時代中期の天曆三年(九四九)、第六十二代村上天皇の御世に創建したと伝えられている。寺名の由来は、それより約百年前の嵯峨天皇の時代(八一〇)八二二)にまでさかのぼる。弘法大師、橋逸勢とも現在の本堂、仁王門、鎮守堂、庫裏が建ったのはほぼ同時期と考えられており、江戸時代中期の延享二年(一七四五)ごろ。それ以前から秀吉の時代までの寺の様子は定かでない。寺の存在は確かだろうが、荒れ果てていたのが再興されたのか、今の建物より大きな物が建っていたが持て余して縮小されたのか、よく分かっていない。

時代の作りらしい。このほかにも同寺には、現在は奈良国立博物館に寄託している「髹漆卓(きゅうしつた)」「室町時代・重文」や、市の指定文化財「足利尊氏寄進状」(南北朝時代)などの文化財もある。

仁王門の茅がふき替えられたのは、最近では昭和五十八年。本堂の大改修に伴って行われた。しかし、その後も風雨にさらされて茅の傷みが著しく、雨もりの心配も出てきたため、府にふき替えを申請。助成が決まったあと、今年十一月中旬から専門の職人四人が作業に取りかかっていた。

松井住職(39)は「寺」という存在を、「来て(仏を)拝むことはもちろんだが、訪れた人が心を落ちつかせられる場所であることが大切では」と話す。長い年月を経ってきた寺のあるがままの風景は、忙しすぎる現代人には一服の清涼剤となりうるのではないだろうか。

総事業費は約五百万円。ふき替えは、組まれていく足場が取り払われて二十日ごろに完成する予定。来年一月一日には、工事のため一時、魂が抜かれていた金剛力士像に魂を戻す法要が営まれる。

正月には金剛力士像に魂を戻す法要